

話し手の心的状態と言語表出



静岡大学情報学部
堀内裕晃



Minsky教授講演会

- 講演の始まり

(1) Thank you very much. (聴衆の拍手
に対して) (第22回バイオテクノロジーシンポジウム招待講演にて)

[Minsky教授講演会映像\(2004年\)¥minsky01.wmv](#)

(2) Thank you, Yoichi. (司会者の紹介に
対して) (2004年静岡大学情報学部浜松キャンパスでの講演会)

Minsky教授講演会の始まりの部分



講演者



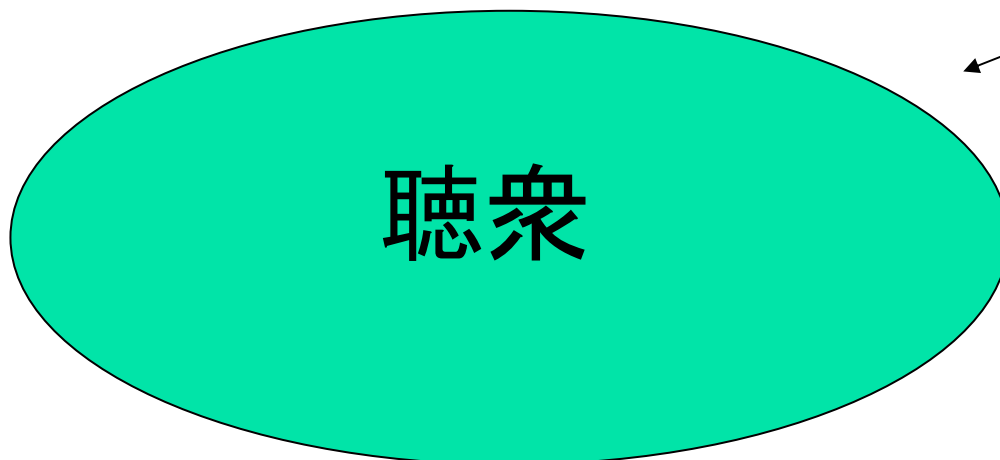
③ Thank you, Yoichi.
(話し手の心の向かう人)

司会者

④ 講演

② 拍手

① 講演者の紹介



聴衆



言語知識とその表出

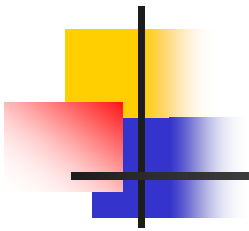
- 講演者は、自分のために何かをしてもらった時にはThank you (very much). と発話するための知識(また、それに伴う動作に関する知識)を備えている。
- 誰に対してThank you (very much). と言うかは、相手との対人関係、その場の雰囲気、その時の気分によって決まる。

(例えば、(2)においても、聴衆の拍手に対してThank you.という可能性もある。また、(1)において、司会者の紹介を聴衆に組み込んでThank you very much.と発話した可能性もある)



芥川龍之介 『手巾』

- こんな対話を交換してゐる間に、先生は、意外な事実に気がついた。それは、この婦人の態度なり、拳措(きよそ)なりが、少しも自分の息子の死を、語つてゐるらしくないと云ふ事である。眼には、涙もたまつてゐない。声も、平生の通りである。その上、口角には、微笑さへ浮んでゐる。これで、話を聞かずに、外貌だけ見てゐるとしたら、誰でも、この婦人は、家常茶飯事を語つてゐるとしか、思はなかつたのに相違ない。——先生には、これが不思議であつた。

- 
- その時、先生の眼には、偶然、**婦人の膝**が見えた。膝の上には、手巾を持った手が、のつてゐる。勿論これだけでは、発見でも何でもない。が、同時に、**先生は、婦人の手が、はげしく、ふるへてゐるのに気がついた。**ふるへながら、それが感情の激動を強ひて抑へようとするせみか、膝の上の手巾を、両手で裂かないばかりに緊(かた)く、握つてゐるのに気がついた。さうして、最後に、皺くちやになつた絹の手巾が、しなやかな指の間で、さながら微風にでもふかれてゐるやうに、繡(ぬひとり)のある縁(ふち)を動かしてゐるのに気がついた。——**婦人は、顔でこそ笑つてゐたが、実はさつきから、全身で泣いてゐたのである。**



話し手の心的状態・心的態度と言動

- 話し手の心は何を/どこを/誰を見ているのか。
- 話し手の心は誰に向かっているか。
- 話し手はどのようなことばを発するか。
- 話し手はどのような動作・しぐさをするのか。
- 話し手はどのようなことばを発する可能性があるか。
- 話し手はどのような動作・しぐさをする可能性があるか。



扱う事例、理論的枠組み

- 1. 擬似分裂文(What型強調構文)
- 2. 指示詞・指示代名詞:「こ」、「そ」、「あ」
- 3. 一人称代名詞:「私」、「僕」
- 4. 終助詞:「ね」
- 理論的枠組み:情報のなわ張り理論(神尾(1991))



1. 擬似分裂文 (what型強調構文)

- 1. Independent thinking is important.
But **what is more important is** to cooperate with each other.
- 2. **What I want to do is** play the piano.
- 3. **What I'm saying is** that we should help each other.



擬似分裂文の形式と機能

- ① What + X(前提) + be動詞 + Y(焦点)
- ② What + 一人称/二人称主語 + 行為動詞or発話
行為動詞 + be動詞 + Y(焦点)
- 平叙文を二つに分裂させ、そのうちの一方を焦点化する。
- 焦点化した部分は、話し手が聞き手に強調して伝えたい情報であり、聞き手にとっては新情報である。
- 擬似分裂文は構文的にこうした機能を果たす。



Minsky教授講演会での擬似分裂文

- [擬似分裂文 \(Minsky 2004 11 4\).xls](#)
- [Minsky教授講演会映像 \(2004年\)](#)
[¥Minsky04強調構文.wmv](#)



特徴

- 「What + 一人称主語 + 行為動詞or発話行為動詞 + be 動詞 + Y(焦点)」の型が多く用いられている。
- 焦点の箇所は、話し手が重要だと思い強調する部分であり、聞き手にとっては新情報である(談話機能的側面)。
- 「What + 主語 + 行為動詞or発話行為動詞 + be」の部分は、新情報を導入するために話し手が聞き手の注意を引き付ける談話標識 (discourse marker) として機能している(対人機能的側面)。
- 多くの場合、be動詞の後にintonation breakが見られる。
- 講演の出だしでは見られなかったが、話が進み聴衆に向かって話すようになってから、焦点の箇所で指差しをしたり、親指と人差し指で丸を作ったりするようになる。

2. 指示詞・指示代名詞:「こ」、「そ」、「あ」

2.1 指示詞「こ」、「そ」、「あ」

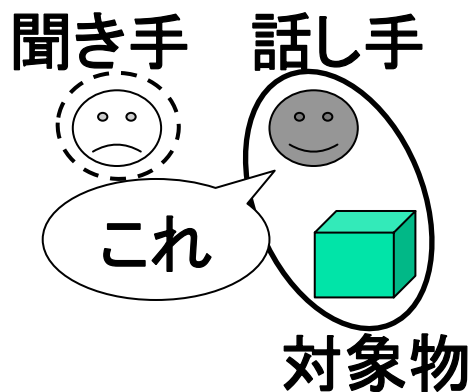
- 「これ」、「ここ」: 話し手にとって近い距離の物、場所
(= 話し手のなわ張りの内)
 - 「それ」、「そこ」: 聞き手にとって近い距離の物、場所
(= 聞き手のなわ張りの内)
 - 「あれ」、「あそこ」: 話し手、聞き手、両者にとって遠い距離の物、場所 (= 両者のなわ張りの外)
-
- X: **こ**の本、捨てていいよ。
Y: え、**そ**の本捨てちゃっていいの？
X: うん。
(Yが本をゴミ箱に投げ捨てる)
 - X: **あ**の本はもう見たくないんだ。



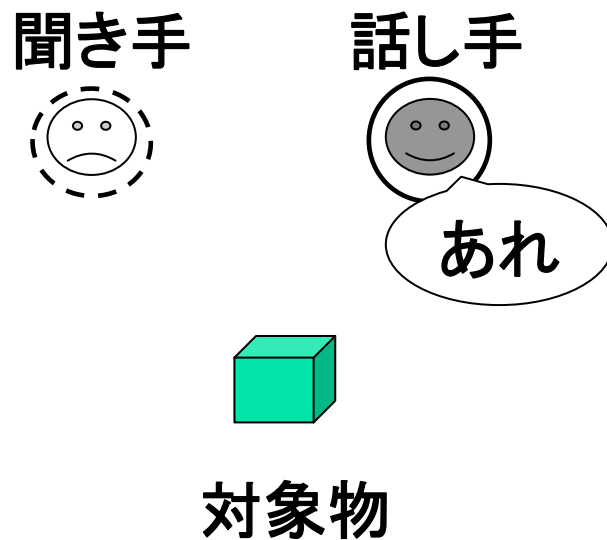
情報のなわ張り理論

- (1) 話し手または聞き手と文の表わす情報との間に一元的の心理的距離が成り立つものとする。この距離は〈近〉および〈遠〉の2つの目盛りによって測定される。 (神尾(1990:21))
- (2) 〈Xの情報のなわ張り〉とは、(1)によってXに〈近〉とされる情報の集合である。ここで、Xは話し手または聞き手とする。 (Ibid.)

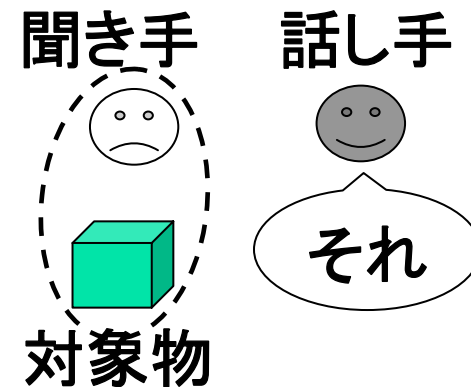
指示詞のなわ張り



話し手と対象物との
心理的距離: <近>

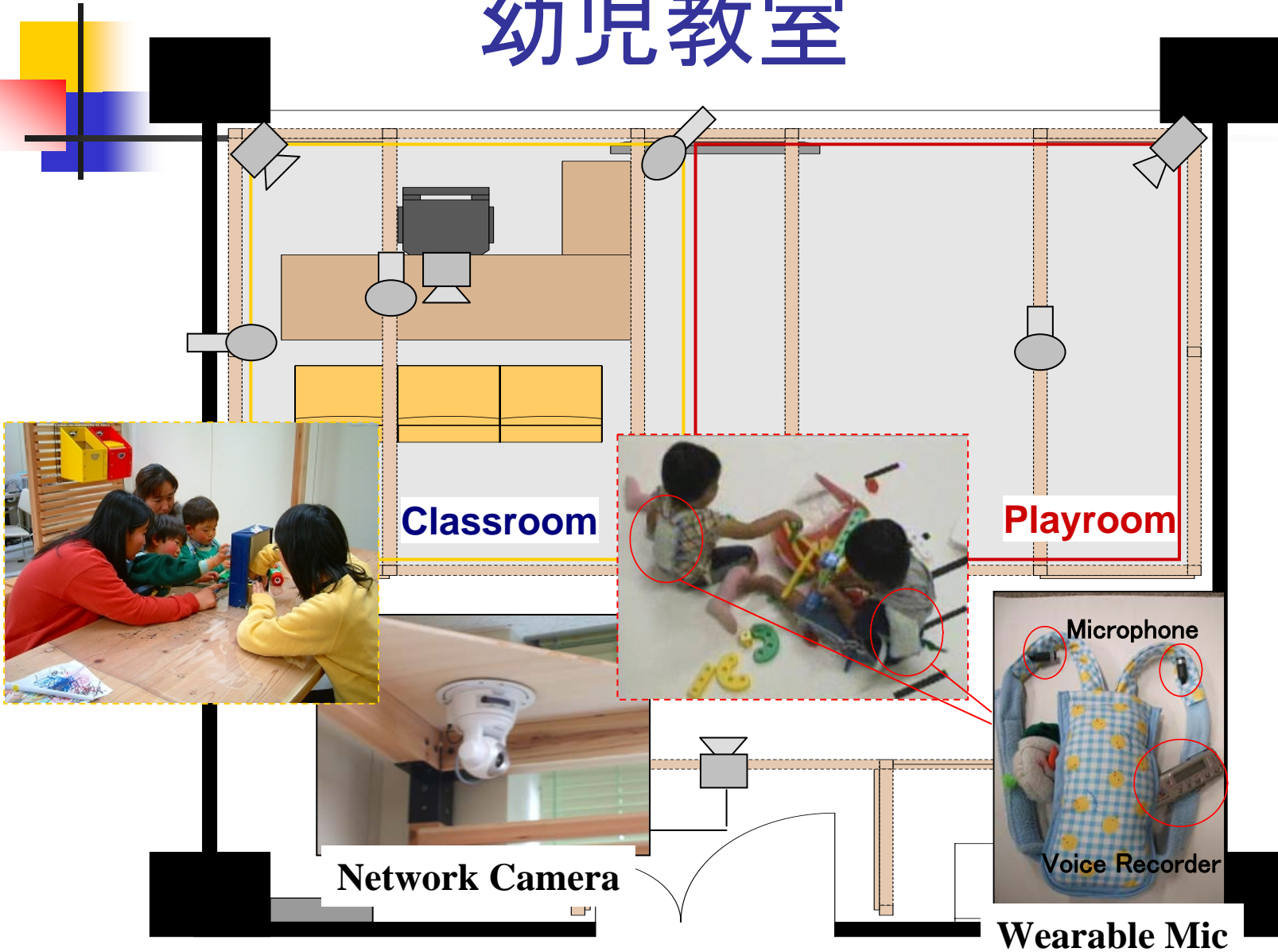


話し手と対象物との心
理的距離: <遠>



話し手と対象物との
心理的距離: <中>

幼兒教室





赤シャツくんの言動

- 状況：赤シャツくんが、他の子が持っているものを奪いに行く。
- 言動：赤シャツくんは、自分の席からその子のところまで行き、「これ」と発話する。
- 赤シャツくんは、2歳になったばかりの段階で、一般的に言われている見地からは、まだ「そ」形を使わない年齢である。もし「そ」形が使えれば、言動としては三つの可能性がある。



「そ」形を使うことができる子の言動の可能性

- 1. 自分の席でお目当てのものを指差して「**それ**」と発話する。(⇒お目当てのものを持っている子)
- 2. お目当てのものを持っている子の席まで行って、お目当てのものを指差しながら「**それ**」と発話する。(⇒お目当てのものを持っている子)
- 3. お目当てのものを持っている子の席まで行って、お目当てのものを指差しながら(あるいは、ものを奪ってから)「**これ**」と発話する。(⇒お目当てのものを持っている子＋それ以外の人)

* これら三つの可能性のうちでどの言動を示すかは、誰に向かった言動かということ、また、相手との対人関係、その場の雰囲気、その時の気分に左右される。



観察対象の2歳児の行動とその意味

- ・相手が使っているおもちゃは、許可が得られないとあきらめる
- ・人のために作ってあげる

2歳11ヶ月

他者のなわ張りへの考慮・理解

他者に対象物を譲渡
他者と対象物の関係から自己の欲求の抑制

他者への考慮・理解

- ・相手への説得
- ・相手に要望・意見
- ・許可を与える
- ・許可を得る

2歳2ヶ月
～
2歳4ヶ月

他者のなわ張りを意識し始める

他者との対象物の共有

他者への意識

- ・相手が自分の物を取ろうとしたら、喧嘩になる
- ・相手が持っているが相手を気にせず取る

～
2歳1ヶ月

自己のなわ張りの形成

対象物との物理的距離

自己中心的



2. 2 指示代名詞「こ」、「そ」、「あ」

(電話でのAとBの会話)

- A:オシムさんが倒れて入院したんだって。
- B:これは/それは/*あれは大変だ。

(講演会にて:日本語擬似分裂文の例)

- つまり私が言いたいことはこういうこと/*そういうこと/*ああいうことなんです。 . . .

(自分の体験を回想して)

- 終戦直後はたしか駅周辺は焼け野原だったよな。あの頃は
ずいぶん苦しかったなあ。



リサ ひこうきにのる

- 「ただいまより スクリーンにて 『カウボーイものがたり』をじょうえい いたします

おんせいは ヘッドホーンで おききくださいませ」

でも わたしのところからは スクリーンが ちょつともみえない！ わたしもみたい！ うーん どうしても みたい！

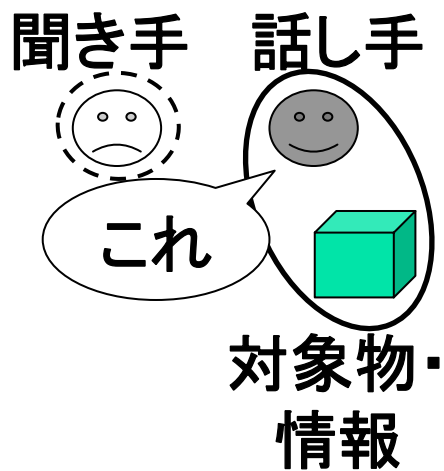
そのとき わたし パツと ひらめいたの



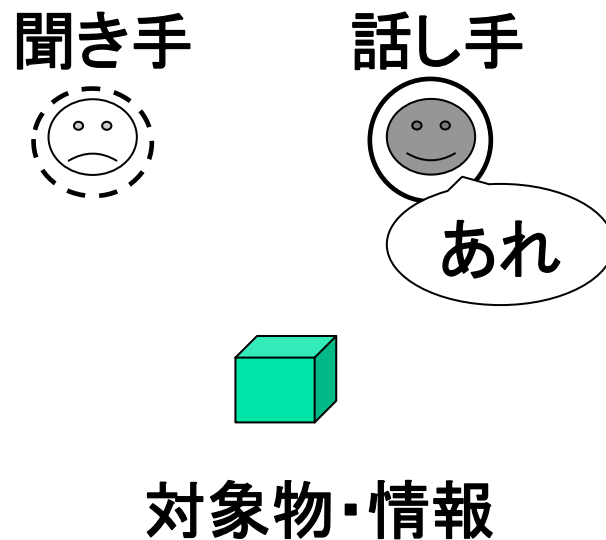
指示代名詞が受ける内容に対する心理的距離

- 代名詞「こ」: 話し手にとって心理的に近い距離（聞き手と情報共有がある場合とそうでない場合とがある。情報共有がある場合は、心理的には聞き手が見えていない）
- 代名詞「そ」: 話し手にとって中立（聞き手との情報共有があり、心理的に聞き手が見えている）
- 代名詞「あ」: 話し手にとって心理的に遠い距離（過去の回想など文脈外の情報を指す）

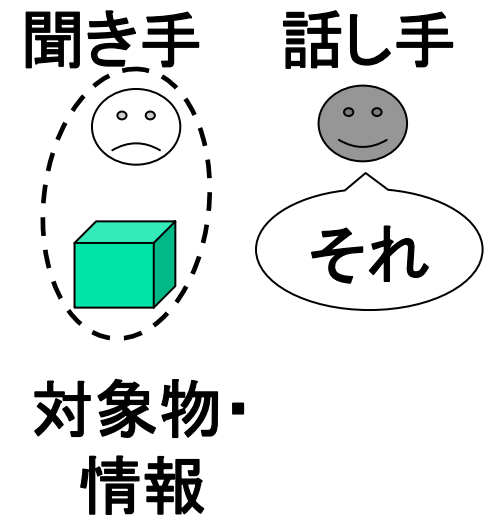
指示詞・指示代名詞のなわ張り



話し手と対象物・情報との心理的距離:<近>



話し手と対象物・情報の心理的距離:<遠>



話し手と対象物・情報の心理的距離:<中>



擬似分裂文と指示詞の共通点

- 1. 話し手が聞き手の関心を自分に引きつけるための言語標識である。

指示詞はそれ自体で言語標識の機能を果たす。擬似分裂文の「what＋主語＋行為動詞or発話行為動詞＋be動詞」の部分は、談話の流れの中でその後に来る内容にprominenceを与える談話標識 (discourse marker) である。

- 2. 多くの場合、指差し (pointing) などの非言語行動が見られる。



情報のなわ張り理論からのまとめ

- 1. 擬似分裂文では、be動詞の後に必ず話し手のなわ張りの内、聞き手のなわ張りの外にある情報がくる。
- 2. 指示詞では、対象物が話し手/聞き手のなわ張りの内にあるか外にあるか、また、話し手の心が誰に向かっているかで、「こ」、「そ」、「あ」のいずれかを使うかが決まる。



まとめ

- 擬似分裂文と指示詞の特徴を情報のなわ張りの視点から捉えた。他の言語現象もこの視点から捉えることが期待できるので、言語知識の一部として、「話し手/聞き手のなわ張り」が存在するように思われる。（「なわ張り」の基盤の**確立⇒知識拡充**）
- 擬似分裂文を使う時と指示詞を使う時の身体言語の共通性を捉えた。
- 人間のこころと言動の発達を、変化でなく**蓄積**として捉える。それによって、大人でも状況と気分によって幼児と同じ言動をする、という事実が説明できる。すなわち、幼児のこころと言動の発達の研究が、人間の根源的コモンセンス、大人のこころと言動の解明にも貢献することになる。
- 個人の言動を継続的に観察し蓄積することから、個人のこころと言動の発達を捉えることができ、個人間の比較も可能となる。

3. 一人称代名詞(私、僕)

- アガサクリスティー自伝

「こちらマシュー、階段を降りていきます。ほらマシューですよ。マシューが階段を降りていきます。こちらマシュー、階段を降りていきます」

わたしたちはみな、自分を見ている者とはべつの人格としての自分自身の存在に気づいたときから、“自分”という観念をもてるようになることにわたしは驚く。(中略) わたしたちは“散歩に行くアガサ”であり、“階段を降りるマシュー”なのである。**わたしたちは感じるよりは見ている。**

そしてある日、人生の次の段階が始まる。突然それはもはや、「ほら、マシューが階段を降ります」ではなくなる。突然それは、わたしは階段を降りる、になっている。“わたし”に到達することが個人生活(personal life)の道程の第一歩なのである。



4. 終助詞:「ね」

- いい天気です**ね**。(話し手のなわ張り:内、**聞き手のなわ張り:内**)
- 父は今出かけています。(話し手のなわ張り:内、聞き手のなわ張り:外)
- お姉さん、来月ご結婚だそうです**ね**。(話し手のなわ張りの外、**聞き手のなわ張りの内**)
- 北海道は昨日は雪だったようです。(話し手のなわ張り:外、聞き手のなわ張り:外)